



やまなみハイウェイ(大分県)

健康ことわざ・故事成語

【 降らぬ先の傘 】

雨が降りだす前に傘を用意すれば濡れずに済む。
何事も日頃から準備をしておけば失敗しないという喩え。
「今は元気だから」と安心せず、バランスの良い食事や
適度な運動、ストレスの解消などで「病気になるにくい
心身」を保つことが、健康寿命につながります。

脳ドックのすすめ

特集1

～脳の病気リスクを早期に発見する

さまざまな脳疾患の発症リスクを早期に発見し早期治療につなげる「脳ドック」。今回は脳ドックの検査内容や発見できる疾患などについて脳神経外科専門医・指導医の谷口先生にお話を伺いました。

弘善会 矢木脳神経外科病院
院長・医学博士 谷口 博克 先生



■ ■ ■ 未破裂の脳動脈瘤を見つける

—— 脳ドックとはどんなことを調べる検査ですか？

「脳ドック」は1988年に北海道の新さっぽろ脳神経外科病院で始まり、現在では全国各地の医療機関で行われている日本独自の健康診断法です。この背景には、MRI(磁気共鳴画像撮影法)の普及があります。実は日本は世界一MRI装置が普及している国なんです。

脳ドックの当初の主目的は「くも膜下出血」の予防でした。くも膜とは脳の表面を覆っている膜で、その内側で出血する状態がくも膜下出血です。原因の大部分は「脳動脈瘤」の破裂です。脳動脈瘤とは脳の血管の一部が瘤(こぶ)状に膨れたもので、あるとき突然破裂してくも膜下出血を起こします。この病気の致死率は高く、3人に1人の割合で死亡し、生存した人も高い確率で後遺症が残ります。しかも発症のピークは40～50代の比較的若い層で、サラリーマンで言えばようやく課長・部長になったぐらいの働き盛りの年代なんです。



MRI装置

—— 脳ドックでも膜下出血が予防できるのですか？

脳ドックはMRIやMRA(磁気共鳴血管撮影法)で脳とその血管を見るのが主な診断なので、もし脳の血管に未破裂の脳動脈瘤があれば、90%以上は発見できると言われています。未破裂のうちに発見できれば予防的処置によって未来の破裂を防ぐことができます。方法としては、今はカテーテルで脳動脈の中にプラチナのコイルを入れていって、瘤の内部をコイルで塞ぎ脳血管内治療が主流です。場所によっては開頭手術で頭を開いて脳動脈瘤の根元をクリッピングして血行を止める方法をとることもあります。



MRI検査の3D画像(矢印の部分に動脈瘤)

—— 脳動脈瘤は必ず破裂するものですか？

必ずという訳ではありません。大まかに言って破れる確率は1年間で1%程度です。ですから高齢の方で小さな動脈瘤ならば、経過観察が選ばれるケースも多いです。ただ40代くらいの若い方の場合、生きていく間にそれが破れる確率も余命の長い分だけ高くなりますから、将来的に破裂の可能性が高い一定以上の大きさの未破裂脳動脈瘤には治療が望ましいと言えます。

■ ■ ■ 無症状の脳梗塞に潜む将来のリスク

—— 未破裂の動脈瘤以外にも分かることはありますか？

色々ありますよ。最近の脳ドックではMRIで脳の血管の様子も分かるので、たとえば「無症状性脳梗塞」、つまり本人には目立った症状は表れていないけれども、画像で見ると脳の血管の一部が詰まっているような状態も見つけられます。

脳梗塞が起きて脳の血管が詰まると、その先の組織が壊死して機能しなくなります。ですから手足の動きを司る部分が脳梗塞になれば麻痺が出るし、言葉を司る部分だと言語障害が起きたりします。ただ脳血管の先の細い部分が詰まっても、組織に大きな影響はないため、小さな脳梗塞では表向きの症状が見られないこともよくあるのですね。

—— 症状がなくても治療が必要ですか？

小さくても脳梗塞が起きている以上、そこには何らかの原因があるはずで、それに対処しなければ、今は無症状の動脈硬化で済んでいても、将来同様のことがもっと重要な血管に起こる可能性があるのです。脳の血管が詰まる原因には脳血管の壁にコレステロールが溜まって厚くなり血流が悪くなる動脈硬化の他、心臓の働きが悪く血が澱んで血栓が生じ、それが血流に乗って脳に移動して血管を詰まらせる場合など幾つもあります。

無症状性の小さな脳梗塞が見つかることで、その原因を調べ、もっと大きな脳梗塞にならないように適切な薬を飲む、あるいは生活習慣を改善する、といった予防措置をとることができるわけです。

■ ■ ■ 40歳になったら一度は受診を勧める

—— 脳ドックで認知症の診断もできるのでしょうか？

ご存じのように脳には「海馬」と呼ばれる記憶を司る場所があり、アルツハイマー型認知症の初期段階ではこの海馬の萎縮が見られます。脳ドックのMRI画像を分析することで海馬の体積を推測できるので、萎縮があるかどうかは分かります。ただしそれだけでは認知症リスクの



評価としては十分ではありません。海馬に萎縮があるからと言って必ずしも将来アルツハイマー型認知症になるとは限らないのですね。

そこで最近では脳ドックのコースの中に認知症診断のメニューを加える病院が増えています。私の病院でも実施していますが、認知症診断のコースを選べば、MRI・MRA検査だけでなく、専門医師による問診や身体検査、神経心理学的な検査を併せて実施することで、認知症のリスクについても総合的に調べることができます。

—— 特に脳ドック受診を勧めるのはどんな人ですか？

基本的に脳ドックというのは脳や脳血管に潜む危険因子を発見し、それらの発症や進行を防止するために行う検査です。ですから特になんらかの自覚症状がなくても、色々な病気が増えてくる中高年層の方、特に一家を支える働き手の方は、一度脳ドックを受診してみるのがよいと思います。

昨日まで元気に働いていた人がくも膜下出血で突然倒れ、そのまま亡くなってしまったというような話は、しばしば耳にするとします。そういうとき残された家族は何の心の準備もないまま死に直面し、生活面でも多大な影響を受けることになります。そうした事態を避けるためにも、40歳になったらご家族のためにも脳ドックを一度受診されることを、私はおすすめしています。

—— ありがとうございます。

脳ドックで見発できる脳の病気

脳動脈瘤	脳の細い血管にできるコブのことです。放置すると破裂し、くも膜下出血を引き起こす場合があります。
脳梗塞	脳の血管が詰まる病気です。自覚症状のない小さな脳梗塞が発見されることもあります。
脳腫瘍	脳の中に腫瘍ができる病気です。良性腫瘍でも脳や神経を圧迫したり巻き込んだりします。
その他	生まれつきの血管の奇形である脳動静脈奇形や動脈硬化により頸部の動脈が細くなっている頸動脈狭窄症等があります。

次の症状をお持ちの方や思い当たる方には
脳ドックの受診をおすすめします。

- 物忘れがひどくなった
- のぼせがある
- 頭痛もちである
- 頭重感がある
- 突然の頭痛におそわれたことがある
- めまいやたちくらみがする
- 耳鳴りがする
- 舌がもつれたり、話づらいことがある
- ものが見にくい、二重に見える
- 手足が震えたり、ものをよく落とす
- 手足が抜けるような発作をおこしたことがある
- 気が遠くなったり、目の前が真っ白になったことがある
- 以前から血圧が高い、狭心症や心筋梗塞になったことがある
- 親兄弟が脳卒中やくも膜下出血になったことがある



取材協力：医療法人弘善会 矢木脳神経外科病院

2008年、大阪市東成区に脳卒中センター機能を有する92床の病院として開設。日本脳神経外科学会専門医・指導医、日本頭痛学会専門医・指導医が数多く在籍しており、脳ドックの主検査であるMRIには脳血管疾患の検出



を高精度で行える最新機種(3.0T)を導入しています。

●病院ホームページ <https://yagi.link>